

# 諏訪の巨石と縄文遺跡探訪

&

## 蓼科山の巨石（美咲 LIVE—美咲さんのブログより）

副会長 柳原輝明

2008年10月23日と24日の二日間長野県の諏訪に渡辺会長と出かけた。これは、会員の萩原さんより諏訪においてイワクラ（磐座）学会のサミットを開ける可能性があるかどうか、諏訪のイワクラを見て欲しいという要請によるものである。

10月23日8時58分発の「しなの9号」で長野県の茅野市に向う。日頃はたいていのところは車で行く傾向があったが、今回は久方ぶりに乗る在来線の特急である。なんとなく嬉しい。

列車に乗ること4時間27分で茅野市に到着した。茅野駅に着くと萩原さんと地元の篠原さんそれに若い女性、美咲さんが出迎えてくれた。篠原さんの運転で出発。車の中で、美咲さんが長野県を活動範囲とするシンガーソングライターであること、巨石大好き人間であること、また、巨石に触発されて巨石にまつわる歌を作りCD

にしていることなどを聞いた。

そうこうする内に車は諏訪奥宮に到着。その奥にある小高い丘の上に建つ小ぶりであるが落ち着いた佇まいの社「鶏冠社」（図・1）



図-1 鶏冠社

に御参りする。傍らの安国寺史友会の立て札に「柎の宮、楓の宮、つかさの社、とさかの社、鶏神等様々に呼ばれているが大祝の職位（即位）式が執り行われた磐座があり前宮諸社のうちで最も重要な

秘所であり聖地であった。萱むしろを敷き簀を立てまわし、雅楽吹奏のなかで山鳩色の装束をつけて呪印を結び四方を拝して諏訪明神の御神体として現人神となる大祝の即位式がとり行われた遺跡地である。古くは上伊那郡非持山室郷の奉仕によつて造営されていた。」とかかれてあった。

少し降った所に巨木あり。足元になにやら石組みがある。（図・2）



図-2 御室社

傍らの立て札に「御室社 中世までは諏訪郡内の諸郷の奉仕によって半地下式の土室が造られ現人神の大祝や神長官以下の神官が参籠し蛇形の御体と称する大小のミシヤグジ神とともに「穴巢始」といつて冬ごもりをした遺跡地である」と書かれてあった。その後、少し山道を登ったところに巨大なイワクラがが鎮座していた。小袋石である。立て札に曰く『諏訪七石の一つで磐座信仰遺跡である。別名「舟つなぎ石」ともいう。高さ六間五寸、横四間二尺と古図にある。小山のような石である。小松数本が岩の割れ目に自生し、頂上に舟をつなぎ易い形が見られる。太古、諏訪の水がここまでついでいて、船を繋いだと言ひ伝えられている。』(図・3)

小袋石を少し降った所に石の祠があり「磯並社」(図・4)がある。立て札に曰く「大祝職位のときの上十三所御社参の重要祭場のひとつ。近くに瀬明神、穂股明神、



図-3 小袋

玉尾明神もあったという。古図によれば神事屋・舞台・五間廊・帝屋などがあって、旧暦三月午日の祭には草花でかつらをつくり額にかける風習があった。」

次に向ったのが、諏訪大社であるが、その途中に地元出身の著名な建築家である藤森照信氏の設計した小さな資料館があるというところで立ち寄った。この資料館は、守矢家の文化遺産を展示しており、



図-4 磯並

守矢家は、古代において「洩矢の神」と呼ばれ、諏訪大社の祭祀を司っていた家である。小さい資料館であるが、特異な形状をした建物など一見の価値はある。

諏訪大社上社では本殿の斜め上方部に磐座が鎮座していた。また、本殿を降ったところにも磐座があり注連縄を張り巡らし祀られている。(図・5)

次に向ったのが縄文のビーナス



図-5 諏訪大社磐座

で有名な尖り石遺跡である。途中中ツ原遺跡に立ち寄った。そこは「仮面の女神」の発見されたところであり、その発掘の有様が保存されていた。傍らには巨大な柱が6本立ち並んでいた。青森の三内丸山遺跡の巨大列柱と同じような形であるが、変に小細工せず列柱のみを展示しているのがよい。(図・6)



図-6 中ツ原公園列

尖り石考古館に行く前に尖り石本体を見に行った。高さ1m程度の三角形の石である。立て札には、「この一帯は明治25年頃桑畑にするために開墾され、そのとき見慣れない土器や石器が多量に出土しましたが、崇りを恐れて捨ててしまったといわれています。また、この土器や石器は、大昔ここに住んでいた長者の残したものである」と、長者屋敷と呼び習わしていました。

そしてこの「尖り石」の下には宝物が隠されているとの言い伝えから、ある時村人がこっそり掘ったところ、その夜たちどころにおこり（熱病）にかかって死んでしまったとの事です。この石を神聖視する信仰から生れた言い伝えでしょう。

石質は、八ヶ岳噴出の安山岩で、地中に埋まっている深さは不明です。右肩の槌状のくぼみは磨りあともから人工のものと思われ、縄文時代に磨製石斧を製作した際に、共同砥石として使用されたとも、また縄文時代は石を重要な利器とした事から、地中から突き出したこの石を祭祀の対象としたものであろうとも言われています。」とあった。

尖り石考古館では見事な縄文土器が展示されてあった。関西では見かけない量と質であった。それ以上に興味を惹かれたのは国宝の「縄文のビーナス」（図-7）と重要文化財の「仮面の女神」（図

8）である。



図-8 仮面の女神

図-7 縄文のビーナス

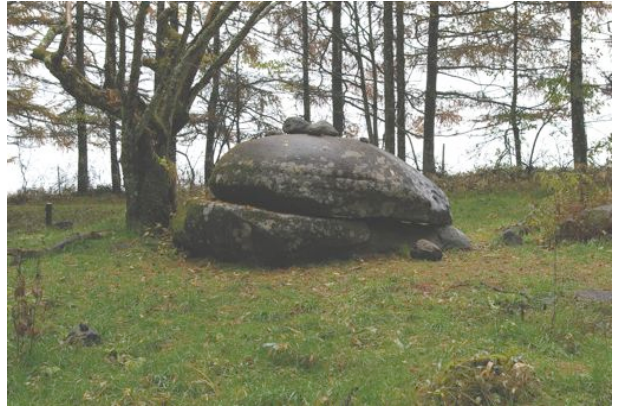
ともに見事な造形美である。縄文時代にこれだけの土偶を作り出した縄文人に感服である。今回の旅で、これを見られただけでも十分の価値があった。

この日は、諏訪湖温泉泊まりである。

あくる日、黒曜石のふるさと鷹山の黒曜石体験ミュージアムを訪れた。案内してくれたのは、長和町教育委員会の大竹幸恵さんである。驚くべき博識で、我々を飽きさせなかった。また、このミュージアムが出来るまでのいきさつや、その運営の仕方など、多くの市町村の同種の博物館に大いに参考になると思った。このとき頂いた「黒曜石の原産地を探る」（A5版94ページ新泉社）は結構興味深く読ませてもらった。

黒曜石体験ミュージアムで結構時間を食ったため、大急ぎで次の地点に向った。

立科町の雨境峠に鎮座する「鳴石」である。（図-9）だいたい前に、大場巖氏の本で雨境峠と鳴石のことを読んだ。そのとき、この石を見る機会はないだろうと漠然と思っていたが、今回図らずも見ることが出来て感激である。岩そのものはそれほど巨石ではない



が二枚重ねの石で、打つと神秘的な響きが人々の心を安らげる事から、檀（まゆみ）の古木とともにこの名所となっている。伝説に、「風強く吹けばこの石が雷雲たつある時石工が玄能（げんのう）にてこの石を割らんとすれば山鳴り谷こたえて曇り火の雨降り石工悶死する」とあり当時の人々の神秘感を伝説にとどめている。

このあたり一帯から多くの勾玉が出たことから「勾玉原」と呼ば

れているようである。広大な草原である。「鳴石」のすぐ傍らに明らかに環状列石と見える列石群が見られたが、これには何の案内も無い。また、この原っぱに高さ1m弱の石が延々と直線状（ひよつとすると巨大な円弧状）につながっているのが見受けられた。これなども古代の巨石遺構であることは充分考えられる。

帰りの汽車の時間の都合で、次の井尻遺跡を見に行く時間がなくなってきた。会長のたつての願いで、昼食時間を削って見に行く事にした。昼食に、信州ソバを食べようと考えていた私にはちよつと残念であったが、・・・。

井尻遺跡は、昭和41年中部高地を代表する縄文時代の遺跡として国の史跡に指定された。遠く富士山を遠望できる絶景の地である井尻考古館前には、レプリカであるが、発掘のときの環状列石が展示してあった。

考古館内部は、縄文土器の逸品

が所狭しと並んでいる。それら土器についている模様が多様でまたおもしろい。学芸員の小松隆史氏の案内で興味深く拝見した。またここでも、みごとな土偶が数点展示されていて、これには強くひきつけられた。（図・10）



図-10 始祖女神

有意義な探訪であった。これらは、地元の遺跡に詳しい人の案内があつてこそ成し得たことで、一般の旅行者ではこうは行くまいと思つた。

今回の探訪で、イワクラ(磐座)学会のサミットを開く上で、史跡、遺物に不足は無いと確信した。ただ当地区は、縄文の遺物が非常に潤沢で充実しているために、縄文時代の遺物である「イワクラ」のほうにもう一つ目が行っていないように思えた。逆に言うと、縄文遺跡の宝庫である諏訪で、イワクラの遺跡としての重要性をアピールするよい機会かもしれないと思う。

最後になりましたが、きっかけをつくって頂いた荻原哲郎さん、2日に渡り車を運転し、案内していただいた篠原正司さん、そして美咲さん有り難うございました。

今回、1泊2日と言う限られた日数で、多くの諏訪の縄文時代遺跡・遺物を見る事が出来、非常に